2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
人間健康学部 人間健康学科	教授	丸岡　利則
最終学歴	学　位	専門分野
大阪府立大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了	修士・ 社会福祉学	社会福祉学

Ⅰ　教育活動

○目標・計画

（目標）

社会保障制度や福祉サービスは、われわれの生活や人生と密接につながっている。現在では、その制度設計の変更も含めた将来像が問われている。そのために社会保障を科学する教育では、豊かな人間性を涵養し、福祉分野等で即戦力として活躍しつつ福祉社会の創造的担い手となる専門職業人（オンリーワンの人材）の養成につながる使命感が問われるだろう。とりわけ、社会福祉教育においては、少子高齢化などの社会保障問題を学生自らが社会問題として自己の問題として受け止めて考察できるようになることを第一の目標とするものである。

（計画）

現代社会は、経済の先行きが見通しづらく、人々の生活も暮らしが上向くイメージが描きにくくなり、格差意識の高まりなどにより社会不安が高まっている。そのような日本社会への閉塞感を反映して、社会保障制度や社会福祉システムのあり方について、これまで以上に人々の関心が高まっているだろう。したがって、それらを再構築するためには、状況を的確に分析し、社会保障をより充実したものにするビジョンなしには考えられない。教育課題を達成するための計画は、世界の社会保障の動向をみながら、日本の社会保障の目的や機能、日本の社会と社会保障の現状、これからの課題等について問題解決の方策を示し、そのビジョンを教育の中に取り入れていく必要がある。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

公的扶助論、人間健康特講Ⅱ（国際比較福祉論）、人間健康特講Ⅵ（社会福祉史）、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、人間学概論

（後期）

社会保障論、障害者福祉論、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

前期の講義から３年ぶりの対面授業で対応した。本格的でかつ楽しい授業の開始というのが全体の方針だった。毎回、前期・後期も講義は、レジュメを１枚配布し、パワーポイントでレジュメの内容を要約しながら、社会問題を中心に「問題意識の涵養」という授業を心掛けた。特に特講Ⅱ「国際比較福祉論」の学生の授業評価では、これまでの海外での経験談（失敗談）を毎回披露したことで、それが各国の福祉政策への理解の助けとなったというコメントがあった。

演習では、これも基本が対面授業で対応した。特に後期の各演習では、学生間のディスカッションを実施して、主体性を引き出す学習ができるようにした。

○作成した教科書・教材

講義・演習科目の教材としては、教科書を使わず、レジュメはすべて紙媒体のものを配布した。演習については、毎回、パワーポイントを教室で使用し、学生に意見を求めた。

○自己評価

講義科目では、独自のレジュメ裏表（４ページ分）のプリントを毎回１枚配布した。それは、シラバスによって構成された各章の資料であり、各科目の講義のポイントを把握できるように工夫したので学習効果がもたらされ、おおむね目標が達成された

Ⅱ　研究活動

○研究課題

ライフワークである社会福祉学の学問・原理研究のなかでも、特に社会福祉の学問論を扱う領域を中心に研究している。その方法は、メタ・クリティーク（形而上学的批判）を根底においた社会福祉学の「知識と認識」の確立を課題とする。

○目標・計画

（目標）

「社会福祉学の知識」に関する研究の目標は、社会福祉学の制度的な系譜学的分析として、１つは「制度」の由来や系譜を分析すること、２つは、学問をめぐる成立条件としての「知識の客観性」を探求することにおくものである。

（計画）

「社会福祉学の知識」の全体像は、すでに社会資源論とニーズ論の成果を踏まえ、対象論のクリティークを射程に入れて完成を目指し探求してきた。今年は、社会福祉理論の系譜学的分析と学問の成立条件を総合し、最終的な局面としてソーシャルワーク理論の作成にむけた研究を完成することにある。

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・丸岡利則「第 2 章　人間学のスピンオフ―厄介なる主体のエピステーメー―」、西尾敦史ほか編著『人間健康学』（唯学書房）2023 年 2 月、頁数：13 頁（ｐ17－29）

・丸岡利則「第 5 章　ソーシャルワークの基本概念―社会福祉学の知識Ⅵ―」、愛知東邦大学地域創造研究所編『少子高齢社会のヒューマンサービス』（唯学書房）地域創造研究叢書（No. 35）2022 年 12 月、頁数：16 頁（ｐ60－75）

・丸岡利則「第１章　ソーシャルワークのメタ・クリティーク―社会福祉学の知識Ⅴ―」、愛知東邦大学地域創造研究所編『高齢者の保健・福祉・医療のパイオニア』（唯学書房）地域創造研究叢書（No. 34）2020 年 10 月、頁数：22 頁（ｐ3－24）

・丸岡利則「第７章　レジデンシャルケアのメタ・クリティーク―社会福祉学の知識Ⅳ―」、愛知東邦大学地域創造研究所編『高齢社会の健康と福祉のエッセンス』（唯学書房）地域創造研究叢書（No. 32）2019 年 11 月、頁数：59 頁（ｐ66－124）

（学術論文）

・丸岡利則「社会福祉の現実世界と学問の臨界―理論と現実の対話を求めて―」（日本福祉図書文

献学会）福祉図書文献研究（第 21 号）、2022 年 12 月、頁数：15 頁（ｐ3－17）
・丸岡利則「社会福祉学の知識Ⅲ―対象論のメタ・クリティーク」東邦学誌（第 47 巻第 2 号）2018 年 12 月、頁数：21 頁（ｐ79－99）
・丸岡利則、丸岡桂子「スクールソーシャルワーク実践の可能性」東邦学誌（第 44 巻第 2 号）2015 年 12 月、頁数：22 頁（ｐ69－90）
・丸岡利則「社会福祉学の知識―理論と現実の境界線」東邦学誌（第 44 巻第 1 号）2015 年 6 月、頁数：14 頁（ｐ87－100）

（学会発表）
・丸岡利則『社会福祉の現実世界と学問の臨界』（第 23 回日本福祉図書文献学会・基調講演）、2021 年 9 月 11 日、於・愛知東邦大学（オンライン開催）

（特許）
なし

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）
なし

○所属学会
・日本社会福祉学会、大阪府立大学社会福祉学会

○自己評価
本年度の研究活動としては、著書論文が２つ、紀要論文が１つだった。１年間という短期間では、これまでにはない量となった。むろん、質の問題もあるが、内容としては、社会福祉学の知識について整理をした点や、また目標としての社会福祉理論の系譜学的分析と学問の成立条件を総合した点で、最終的な集大成となったとも言えるだろう。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）
１つは、本年度から始まった教養教育運営センター並びに同運営委員会の適切な運営と次年度開講科目の調整などを主に実施するものである。２つは、研究活動委員会においては、研究活動の推進、連携および支援、研究における産学官連携の支援などを中心に、他は、次代を担う研究者の育成支援、学内研究費の運用の検討を進める。３つは、研究倫理委員会においては、研究実施計画及び出版公表原稿等の審査、研究の検証、その他研究上の倫理に関することを遂行するものである。

（計画）
１つは、委員会では、次年度のカリキュラムのなかでの総合教育の基本コンセプトである教育理念および教育目的の発信を第一に掲げながら推進する必要があるだろう。２つは、研究活動委員会では、公募型学内研究の整備、共同研究の調査及び検討、研究支援強化策の検討を重点施策として計画を進めたい。３つは、研究倫理審査に関わる規程の整備、研究倫理教育の受講徹底と新たな教材の選定や研究倫理ｅ-ラーニングによる受講の徹底などを進めていく。

○学内委員等

教養教育センター運営委員会、研究活動委員会、研究倫理委員会

○自己評価

研究活動委員会・研究倫理委員会は、２年目に突入し、毎月の会議は案件も多かった。特に、事務レベルの問題では、規程の修正が何度も議題になったが、その条文の整備が追い付かず多少の困難が生じた。研究倫理委員会では、以前と比較して増加傾向にあり、教員からの「倫理審査申請」が多く提出され、年間で１５件（毎月１件以上）も提出があった。

教育政策委員会は、教養教育の在り方について議論を重ね、それに伴って 2023 年度以降の非常勤講師の面接やカリキュラムの検討を行った。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

社会貢献、とりわけ地域貢献は、大学の存亡にもかかわる重要な社会要因とリンクしている。その中にあって、社会から期待される大学として存在するためには、大学構成員が建学の理念がもつ精神を理解し共有するとともに、その具現化に向けた地域貢献への教育目的の適切性と実践活動を広く社会へ公表することが重要である。そのために、地域福祉実践や地域のボランティア活動において、社会ニーズの分析とともに、本学の理念および目的との整合性について継続的に検討する必要がある。

（計画）

現在では関西地区での精神障害者の作業所の運営にボランティア活動をしているが、今後は名古屋、名東区などの地域の行事や諸活動に参加し、地域福祉活動での実践的役割を果たしたい。

○学会活動等

コロナ禍以降、長年続けて来た愛知東邦大学、広島国際大学、神戸女学院大学などの教員との合同の「ソーシャルケア学会」の運営活動は、中断したままで結局、再開の時期が到来しなかった。学会発表では、昨年 2022 年度での愛知東邦大学でのオンライン開催の「第 23 回・日本福祉図書文献学会」以降、まったく発表の機会を失ったままである。

○地域連携・社会貢献等

コロナ禍であったが地域福祉実践や地域のボランティア活動に継続的に参画した。

○自己評価

社会貢献については、コロナ禍であったが社会福祉法人である精神障害者の団体の運営（監事）と理事会に参画し、それが自己研さんにつながった。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

研究と研究方法や実質的な内容を結びつける研究会や学会への参加への積極的な取り組みを実践したい。今年度は、単著論文１本、学会誌論文１本、共著テキスト１本を予定している。

Ⅵ　総括

大学教員の自己点検として２つ総括ができる。１つは、学部長時代から、とりわけ研究中心の人間健康学部としてのスローガンである「publish or perish（論文を書け、さもなくば去れ）」を

強調してきた。ところがこれを自分自身に置き換えて見ると、個人の業績として大した成果があったわけでもない。したがってこれは、研究の質の問題である。もともと原理研究という究極の選択した自己の責任であり、テーマの選択分野に限界があったというしかないだろう。かりに各論などを手掛けていたら、量産は可能だったと推測できるが、そもそも原理研究が量産には向かないということが引き返せない限界である。

２つは、1 年のうち、教授会の開催後に開催した「部内研究会（教員の研究発表時間 60 分)」の充実であった。今年度は 2 回開催し、教員間での研究に対する刺激を鼓舞してきたが、これは、今後の学部における研究中心というテーゼについての再度の部内コンセンサスが必要だと思われる。

以　上